



Title	山我哲雄訳「旧約聖書 民数記」
Author(s)	桑原, 俊一
Citation	基督教学, 38, 23-27
Issue Date	2003-06-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46669
Type	other
File Information	38_23-27.pdf



山我哲雄記

『旧約聖書 民数記』

(岩波書店 二〇〇一年)

桑 原 俊 一

本書は正式には『旧約聖書 Ⅲ 民数記 申命記』で、旧約聖書翻訳委員会訳による『聖書』翻訳である。山我哲雄氏(以下山我氏という)は民数記を担当されている。従って、ここでは山我氏分担部分の書評をさせていただくことにする。

いわゆる文字の神聖視観は多くの宗教文書に看取できる現象である。キリスト教の母体となったユダヤ教にも聖典の神聖視は貫かれているものの、ヘブライ語を最も重要な言語として位置づけてきたことは変わらなかった。キリスト教の場合、原典『聖書』から他言語への翻訳は民族宗教から世界宗教へ飛翔する過程で必然的であった

といえる。今日、世界で最も多くの言語に翻訳された書物といえば、『聖書』であることも頷けよう。

日本で現存する最古の日本語聖書として有名なギュツラフ訳の「ヨハネ伝」「ヨハネ書簡」(一八三七年)に始まり、近年のカトリックとプロテスタントとの「新共同訳聖書」(一九八七年)に至るまで既にはば一五〇年の翻訳史がある。

序文が少々長くなったが、日本において、また聖書翻訳の歴史にまた新たな一頁が加えられることになった。岩波書店から出版された新・旧約聖書翻訳委員会訳(以降旧約聖書翻訳委員会訳に限る)による聖書である。旧約聖書翻訳委員会とあるが、個人訳といってよい。岩波版旧約聖書翻訳委員会ははしがき(vii―viii頁)でその狙いと特徴を挙げている。「旧約聖書をこれまで以上に身近なものとし、その世界との対話をいっそう深めるための土台を提供することを主な狙いとしている。」「(1)ヘブライ語原典に従った範囲および配列。…(2)内容理解への補助手段。…本文だけでは理解が届かないと思われる歴史的事情や事実関係について、また固有の用

語や言い回しについて、脚注や巻末の補注で必要な解説を行う。さらに写真、図版、地図など、視覚的なものもできるだけ取り込んでイメージの面からの補いとした。

(3) 訳者名の明示。：。(4)：学問的な精確さ：：などが特徴として挙げられている。本シリーズの翻訳の意図はきわめて今日的課題、つまりわたしたちは世界の異なる民族・宗教・文化を相互に理解し、持続的対話への可能性を探る必要性が急務であることを認識し、これに果敢に応えようとするものである。

民数記は山我氏による翻訳で、二〇〇一年一〇月の出版である。すでに氏は本シリーズのレビ記を二〇〇〇年四月に訳出出版されている。本書の構成は本シリーズの『聖書』翻訳の性質上、訳文とそれを補足する脚注部分が主要なものとなる。それに引き続いて学問的かつ洞察力に満ちた解説が施される。末巻の見出し目次や用語説明も大いに役立つ。

訳文には伝統的章節区分によらず内容の單元ごとに随時適切な見出しが付される。翻訳の底本としてはマソラ本文に基づき、ヘブライ語聖書校訂版『ビブリア・ヘブ

ライカ・シュトゥットガルトンシア』が用いられている。翻訳は縦書き、日本語聖書訳の慣行にならない初出の漢字はルビがふられる。本シリーズの顕著な特徴は各頁のほぼ三分の一が訳文の用語に関する脚注に費やされていることである。欧米では脚注付聖書、典型的なものに、*The New Oxford Annotated Bible with Apocrypha, Revised Standard Version (New York, 1973)* 等があるが、日本語訳では関根正雄訳（文末脚注であるが）を除けば、本格的な脚注付聖書は本シリーズが初めてであろう。

翻訳は内容の把握が得やすいように見出しが付けられる。内容構成（二頁）と見出し目次（五一―三一―五一―八頁）を参照するだけで全体の構成と内容理解の助けになろう。もちろん見出しは章節と必ずしも対応するものではなく、文学單元と符合することはいうまでもない。

脚注には今日の文献学的成果に基づく精緻で多様な注が施される。文献学に欠かせない資料上の分析をはじめ、原語や原文の意味の明示、修辭学並びに文法上の問題点の指摘、七十人訳やサマリア五書などの異読や読み替え等に関する注、注解書に匹敵する難解な部分における文

脈上の解説など最近の聖書学による研究成果が余すところなく盛り込まれる。随所に写真や地図を有効に用いて原文の理解を視覚的にたすける工夫がなされている。

そのいくつかを紹介しよう。はじめに資料問題を取り上げる。この資料問題についてはさらに後述することにするが、具体例を挙げておこう。コハラなどイスラエルの民のモーセとアロンに対する反抗を語る一六章と一七章において、一六章の場合、古典的四資料仮説では説明がつかず、祭司文書とヤハウィスト資料に文脈上の調和をもたらすため二次的付加がなされ、更に別の伝承も取りこまれた可能性など文献学的構成の複雑さを明かす(二〇一頁注九)。二一章二一節からのアモリ人の王シホンとの戦いの単元についても、最近の資料研究に基づく多様性が指摘される(一三九頁注九)。また祭司文書系と非祭司文書系の混在する三二章については資料区分の難しさを提示している(二〇六頁―二〇七頁注六)。

資料の混乱や多様な概念などのため、ことばでは文脈の把握が難しい場合、地図や図解の挿入はきわめて有効である。今日の意義を持つ約束の地をめぐる地理的な範

囲、つまり領土問題は資料著者の概念によるが、その歴史的根拠をめぐる賛否両論あるにせよ、地図を用いて解説し、理解し易い(一四〇頁、注二から四等)ように工夫されている。エジプトからカデシユまでの旅程に関する祭司文書系と非祭司文書系の相違も細密な出典と見開き地図で説明されていて明快である(二二〇―二二二頁)。三五章四―五節のレビ人の町と放牧地の面積や方位について多様な議論が図で明示されていてありがたい(二三〇頁と二三二頁)。

聖書翻訳には一度しか出てこないことばや日本語に対応する適切な訳語が見出せない場合がある。これを補うため、補注で簡略で要領を得た用語説明がなされる。例えば山我訳では二一章一〇節等の「ツァーラアト」はあえて日本語に訳さず、原語の音訳にとどめている(既に出エジプト記やレビ記に用例があり、新共同訳聖書では「重い皮膚病」と訳されている)。日本語に相応することばがない以上、誤解を招きかねない安易な訳語は避けて然るべきであろう。時間的にも地理的にも隔てられた聖書のことばは異文化の言語でもある。翻訳上の一つ

の選択肢である。

本文の翻訳と脚注に続いて、濃密な学問的解説が施される。民数記の名称や構成の概説にはじまり、この書に関わる考古学的発見に至る解説はもとより、民数記の枠を越えて資料分析には欠かせないモーセ五書成立史や申命記史書の問題にまで深く立ち入っている。山我氏の学問的精緻さが遺憾なく発揮されるのはこの文献学的資料の分析であろう。既に氏はM・ノートのモーセ五書伝承史、R・レントルフのモーセ五書伝承史的問題、さらにR・N・ワイブリーのモーセ五書入門を翻訳出版しており、資料問題について最新の文献学的研究の成果を提供している。

資料と編集という項(四三二頁以降)ではモーセ五書成立史とそれに関わる問題点がきわめて要領よくまとめられている。まず一九世紀末にヴェルハウゼンが確立し、今では「古典的」と呼ばれる「四資料仮説」を概説する。続いて、とりわけ一九七〇年代半ば以降修正をほどこしつつも基本的には旧来の「四資料仮説」に依拠する諸仮説と根本的批判を掲げる諸仮説を紹介している。さらに

近年盛んな祭司文書以外の議論が取り上げられる。これらの諸説を踏まえた上で民数記の置かれている資料上の問題がいかに従来の「四資料仮説」では分析が困難であるかを指摘する。しかし山我氏は今回の翻訳作業を終えて民数記の成立に二系列の文脈の区別が可能になったという(四三六頁以降)。つまり、本文脚注でしばしば言及される祭司文書系列と非祭司文書系列の区別である。民数記では祭司文書系が全体の三分の二以上を占め、これとはば並行する非祭司文書系を認める。さらに非祭司文書系と四資料仮説の関係を論じ、またその成立年代については祭司文書より古い段階、つまり王国時代の初期にまで遡らせ、前八世紀末頃には現在の形にまとめられたと推定する。この議論は説得力があり、文献学的に大きな成果であるといえる。

資料文書との関連で、祭司やレビ人、荒野の旅、さらにモーセとバラムが関わる物語の緻密な分析が続くが、原文が語る直截で奥深いメッセージを決して置き去りにしてはいない。随所に山我氏は民数記から汲みだされる現代へのメッセージを伝えようと努めている(四七二頁

以降)。

民数記と後続する申命記並びにヨシヤ記の対応がモーセ五書全体の成立の問題として取り扱われる。この対応からいえることは、民数記が実際にヨシヤ記に続いていたこと、さらに申命記が文献学上独立した文書として認められることである。従ってヨシヤ記までを加えて「六書」とする見解もあった。ノートの『伝承史』研究は民数記と申命記並びにヨシヤ記の対応を二次的付加と捉え、事実上「四書」とするもので、その後多くの支持を得ているが、他方、今日批判もまた多々存在する。山我氏はこうした多様な批判や修正を類型的にまとめてくれている(四六一―四六二頁)。最後に文書問題の現況をして、モーセ五書成立に関わる問題は議論こそ多かれ、解決にはなお程遠いと結ぶところに文献学者としての良識があらわれている。

著者渾身の労作である。翻訳と脚注に見られる緻密な分析、学問的見識と原文に対する鋭い洞察力に敬意を表する。最後に、書評というより、本書の紹介に終始してしまったことをご寛恕願いたい。

書 評

土屋 博著

『教典になつた宗教』

(北海道大学図書刊行会)

山 我 哲 雄

本書は、キリスト教の「正典」である新約聖書を「教典論」という宗教学的問題設定の中で扱うという、著者の試みを集めた力作である。著者によれば教典とは、「静的な教義体系を表現するものではなく、むしろ将来に向かって動的に(宗教集団の)アイデンティティを作り出すためのきつかけとなる」(七頁、〔 〕内は評者)ものであり、教典論の課題は、「教典に書き記された教説・思想がどのようなものであったかを考察するだけでなく、そのような教説・思想あるいは教典そのものがどのようにに受容され、実際の宗教生活の中でどのようにに用いられていったかを明らかにする」(四頁)ことである。